

題名： Memento ～忘却の夏

作者： 井戸乃くらぼー

《登場人物》

前野香菜 (24)

神谷龍太郎 (48)

神谷希実子 (15)

杉山浩輔 (17、26)

神谷多恵子 (46)

本物の前野香菜 (22)

医師 / カップル男

看護師 / カップル女

(舞台)

太平洋岸の地方にある海の家「かみや」。

(小道具) ※最低限必要な物

※希実子の学生服

※婚約指輪

※ブローチ×2 (同じ物)

※ガラスの灰皿

※携帯電話

※ジュースまたはビールのケース

※かみやのエプロン

ジュースまたはビールの瓶

ゴーグル

黒いベール (香菜が黒い服であればそれでもOK)

白衣×2

(大道具)

「かみや」の看板

第一幕 第一場

消防車サイレンの音。  
続いて、ニュースの音声。

ニュースキャスター（音声） 昨日夕方、東京都大田区で、会社役員  
神谷龍太郎さん宅が全焼し、焼け跡から神谷さんが遺体と  
なって見つかった火災で、警察は神谷さんの頭部に殴打の  
跡が見られることから、行方不明になっている神谷さんの  
二十四歳の長女を重要参考人として……（F.O）

波の音。明るくなると閉店中の海の家「かみや」の古ぼけた  
看板に向かって、香菜が歩いてくる。

香菜（生気のない顔で立ち止まり、無言で看板を見上げる）

カップルが通りかかる。

男 あれ、珍しいな、あなた、地元の人じゃないでしょ？

この時期に来て、今はどこもやってないよ。

香菜 いえ、昔、住んでたんです。ここ、私の親がやってたお店だった  
んです。

女 ああ、そうだったの。確か経営者変わって、来年からリニューアル  
するって聞いたけど。

香菜 いえ、その予定は……たぶんもうないですよ。

女 えっ、どうして？

香菜 みんな、いなくなっちゃったから。

男 え？

香菜 （会釈してふらふらと上手の方へ）

女 あの、あなた、そっちは……

カップル、去りかけるが不安そうに振り返る。

女           あ、だめ、だめ、そっち行っちゃだめー！！

水音。

男           あ、あ、救急車！   （ポケットから携帯を取り出す）

もしもし、あの、飛び降り、じゃなかった、飛び込みです！  
松が浜の未練崖で、今、女の人が！

暗転。

## 第二場

夕方。

新しい看板がかかった「かみや」の二階。

布団に寝かされている香菜。

少し懐かしい流行曲が外の、スピーカーから流れている。

襖を開けて入って来た希実子が様子を覗いている。

起き上がった香菜と目が合う。

香菜・希実子   わっ！

希実子、部屋から出ようとするが入って来た多恵子とぶつかる。

多恵子           あらー、目が覚めたのね。よかった。

香菜 あっ？

多恵子 病院までの足がなかったから、近所の先生に往診してもらった  
だけなんだけど。どこか、痛いところはない？

香菜 ええ……。

多恵子 じゃあ、今日はとりあえず面接は後回しで、どうぞ夕飯めしあ  
がって行って。

香菜 面接？

希実子 (かぶせるように) この人がバイトなの？

香菜・希実子 (向かい合って同時に) ええっ。

多恵子 あらー、気が合いそうじゃない。兄さんにも言うておくよ。

(部屋から出て一階へ)

二人きりになる香菜と希実子。

沈黙に耐えられなくなった香菜、

香菜 えーっと……、ここはどこ？

希実子 ーうちは、『かみや』って海の家だよ。

香菜 は?!

布団から飛び出す香菜、窓から外を眺める。

香菜 なんて、開いてるの、この店……。

希実子 なんて、って……夏だから？

香菜 何年の？

希実子 2004年。

香菜 (よろめいて) あなたの、お名前は？

希実子 希実子だけど……。

香菜、へたへたと座り込む。

希実子 あなた、の名前は？

階段を上がる音がして、神谷が部屋に入ってくる。

神谷 おい、目が覚めたって？

希実子 ちょっと！ オヤジ、入って来ないでよ。

香菜 (ほぼ同時に) いやー！（失神）

暗転。

スポットライトの中に、杉山浩輔が座っている。  
そこに走ってくる香菜。

香菜 (隣に座って) ごめん、待った？

杉山 ううん、全然。あの、今日はね。

香菜 うん。

杉山 受け取ってほしい物があつて。

香菜 えっ。

杉山 (ポケットから取り出した指輪を香菜の指にはめる)

俺と、結婚してくれますか。

香菜 はい、してあげます。(くすくす笑う)

杉山 ええ、何その言い方。

香菜 だって、してくれませんか？浩輔が訊くんだもん。

杉山 じゃー、結婚しますか？

香菜 しますよ。

杉山 だー、そうじゃなくて！

ふざけてじゃれ合う二人。杉山、香菜を抱きしめる。

杉山 お父さんにも、正式に挨拶しような。あの海の家、俺が引き

継ぎたい。  
うん、ありがとう。

暗転。

### 第三場

夜。神谷家の一階の居間。  
奥正面に香菜、夕食の乗った食卓を挟むように神谷と多恵子が  
向かい合う。多恵子は帰り仕度をしている。

多恵子　しかし、人の顔見て失神するって、兄さんの顔そんなに怖い？

香菜　いえ、ちょっと昔の知り合いに似てて……。

神谷　ふーん。

多恵子　あー、こんな顔してても、根は悪くないのよ。香菜さん助けたの、兄さんなんだから。

香菜　えっ。

神谷　ちょうど海に出てる時だったから。急に潮の流れが変わる頃だしな。

香菜　ありがとうございます……ごさいました。

希実子が降りてきて、食卓から自分の皿だけ盆に乗せていこうとする。

多恵子　希実ちゃん、今日ぐらい下で食べたら。

希実子　……別に、話すことないし。

神谷　香菜さんに、ちゃんと挨拶したのか？

希実子　……。

香菜　あっ、はい、二階でお話しましたよ！

希実子　（ちらっと香菜を見てから）もういいでしょ。

盆を持って二階に上がって行く希実子。

多恵子 (取り繕うように) 紹介したかしら、兄さんの娘の希実子。はい、

今ちょうど難しい年頃なのよねえ。

香菜 そうですね。母親を亡くしたばかりだし。

多恵子 (身を乗り出し) あらー、そこまで聞いた？

香菜 え、ええ……。

神谷 もういいだろう、多恵子。あいつは、ほっとけ。(ポケット

から履歴書を取り出し) ところで、お名前はこちらの『前野香菜』

さんで間違いないですか？

香菜 あ……？ (思い直して) はい。

多恵子 兄さん、面接はまた今度にしたら。

神谷 お写真とはちょっと違うお顔のようだが……。

多恵子 写真より美人で良かったじゃないの。

あ、じゃあ、私これで失礼します。(立ち上がろうとする)

神谷 どこに帰るんですか。

香菜 え？

神谷 (履歴書見て) あんたんち、ここからだバス乗って街から電車で

しよう。もう終バス出ましたよ。

香菜 え……。

多恵子 あらー、じゃあ今晚ここに泊まって行けば。

香菜 そんな、ご迷惑じゃ。

多恵子 大丈夫よね、兄さん？

神谷 何もお構いはできませんがね。

香菜 じゃあ……。 (座り直す)

暗転。

希実子にスポットライト。

希実子 こうして、うちにアルバイトがやってきた。

それは、ちょっとおかしな人だった。

香菜にスポットライト。

香菜　希実ちゃん。

希実子　え（香菜の方を向く）

香菜　あなたのこと、今度こそ幸せにしてみせるから。

希実子　はい？

暗転。

## 第二幕 第一場

神谷家前。

「かみや」のエプロンをした香菜が瓶ジュースの入ったケースを持って入ってくる。

奥から、腰を丸めた多恵子が出てくる。

多恵子　ごめんね、採用前から手伝わってもらっちゃって。

香菜　いいですよ、それより横になってた方が。

多恵子　ええ、でも、じっとしてらんなくって。

ケースを持つと断る多恵子と断る香菜。

制服姿の希実子、登場。

希実子　ただいま。

香菜　おかえり、おばさんがね（話そうとする）

多恵子　（合間に転がった瓶を拾おうとして）ぎゃああっ！！

希実子　……ぎっくりだね。野上さんどこ行けば？



多恵子 昨日からお休みなのよ、お盆より前に休み取るんだって。

希実子 (瓶を拾って) 盆休みに接骨院なんか誰も行かないじゃん。

多恵子 わかんないよ、帰省中のお父さんとか。

希実子 寄生虫のおとうさん……うちみたいなの？ くくつ。

多恵子 そっちのキセイチュウじゃない。

希実子 だってほんとのことじゃん！ 勝手に引越決めて、でもここ

で働いてるのはおばちゃん、自分は貸しボートの小屋でぼんやりしてるだけじゃん！

多恵子 希実子！

香菜 (希実子から瓶を受け取って取り繕うように) 希実ちゃんも

手伝ってくれない？ 私だけじゃ、ちょっと不安なの。

多恵子 そうね、お願い。

希実子 えー、今から遊びに行こうと思ってたのに。

多恵子 あら、あんた友達できたの。

香菜 (辛そうにうつむく)

希実子 うるさいな！ 仕事できないんなら寝ててよ！

希実子、奥に駆け込む。

多恵子 ……あー、うっかり。難しい年頃よねえ。あの調子だから、まだ

一度も友達連れてきたことがなくて。香菜さんみたいな、歳の近い子に来てもらって良かったわ。

香菜 仕方ないですよ。こっちに転校したの、三年の一学期だった

んでしょ？

多恵子 変な時期に転校したと思ってる？

香菜 ……。

多恵子 あの子の母親が死んでね、兄さんはますます荒れて……。

希実ちゃんだけ預かる予定だったんだけど、いきなり兄さんが

海の家を経営権を買って、ここでやり直すって言い出して。

香菜 どうして、海の家なんですか？

多恵子 さあ、兄さんに聞いて？ じゃ、私は寝てます。(奥へ)

香菜 (海を見つめて) どうして、海の家なの……。

暗転。

## 第二場

夜、波の音とスピーカーから流れるポップソング。

「かみや」内で数人の客相手に働いている香菜と希実子。  
ジャージ姿の杉山浩輔が現れる。

杉山 すいませーん。

香菜 いらっしや……（浩輔をじっと見る）

杉山 あの、ちがうんです。この店に忘れ物して……。

希実子 えーと、さっきの学生さんの団体？

杉山 うん。

希実子 ちょっと待って下さいね。（奥に行きながら）忘れ物、何でした？

杉山 ゴーグルです。（香菜に）あ、あの、後でいいです。

（僕ら、合宿で来てるんで、ここにメールください。）

（メモを香菜に渡す）

香菜 えっ。

杉山、走って出て行く。

香菜 こう、すけ……。 （メモを見て）やっぱり。生きてるのね！

希実子が戻ってくる。

希実子 あれ、帰っちゃったの？ ゴーグル見つけたのに。

香菜 連絡先くれたわ、合宿で来てるって。

希実子 あ、じゃあメールするよ。（メモを取る）杉山浩輔、

開明館水泳部……。東京の、名門高じゃん！

香菜 (メモを取り返し) 私が持つてくよ。

希実子 香菜さん、携帯は？

香菜 (携帯を取り出そうとするが戻し) ……うちに、置いて来た。

希実子 やっぱ私が連絡するよ。(携帯を取り出す)

香菜 (メモを渡す) あ、ガラケー、懐かしい……。

希実子 (メールを打ちながら) え？ 何？

香菜 いや、懐かしい柄の携帯だなあって。

希実子 柄なんてついてないけど？ 変なの。『海の家かみや』の

希実子です、Google見つけたのでお渡ししますね！」 これ  
でいいかな。

香菜 明日でいいんじゃない？ もう暗いし。

希実子 (リップを塗りながら) 平気だよ。まだお客さんいるし、

香菜さん留守番してて。

香菜 え、ちょっと待っ……。

希実子、Googleを持って去る。

香菜にスポットライト。

香菜 どうしよう、このままだと二人が付き合っちゃう。

でも、メモをもらったのは、確か浩輔が東京に帰る日

だったのに……？

上手から、神谷が歩いてくる。首に鎖でかけていたブローチを取り出し、  
眺める神谷。それを少し驚いて見つめる香菜。

神谷 (香菜に気づいて、ブローチを慌ててしまい) どうした、来週からで

いいんですよ。多恵子は。

香菜 お帰りなさい。ぎっくり腰みたいで。

神谷 希実子は。

香菜 お客さんの忘れ物を。

神谷 なんだ、しょうがないな。どうぞ、もう上がってください。

店には私がいいますから。(店内に戻ろうとして)

香菜 あの、聞きたいことがあるんです。

神谷 え。

香菜 なんでも、海の家だったんですか？ どうして突然？

神谷 ……波の音が好きでね。嫌な事を忘れられる気がして。

香菜 いやな、こと。

神谷 なんてのは気障な言い草だ。死んだ女房がね、ずっと言っていたんですよ。いつか俺の故郷の海が見たい、って。

香菜 ……もし、過去に戻れたら、奥さんを助けに行きますか？

神谷 面白いことを言うね。過去は変えられないだろう。

香菜 もしもです。

神谷 ありえないな。あいつに言うのか、無理しないで、病院に行けって。それとも過去の自分自身にか、お前が早く気づいてやれって。耳を貸すと思うか？

香菜 そんなの、言わなきゃわからないじゃないですか。

神谷 ……あんたは、あいつに似てるな。まるで、過去の亡霊だ。

香菜 え？

神谷 いえ、おやすみなさい。

神谷、奥へ。

両手をきつく握りしめる香菜。

香菜

ああしてずっと持ってたんだ、あれ……。なんだか、私の知ってるあの人じゃないみたい。

暗転。

### 第三場

杉山が立っている。

そこへ走ってくる希実子。

希実子　こんばんは。

杉山　あれ、君だったの？

希実子　え。

杉山　俺、お姉さんの方に連絡先……。

希実子　お姉さんじゃないよ、うちのアルバイトの香菜さん。

杉山　へえ、そうなんだ。この町に住んでる人なの？

希実子　……ううん……。

杉山　明日もあの店にいるかな。

希実子　……かえり、ます。(ゴーグルを差し出す)

杉山　あ、ありがとう。(去りながら) 香菜さんによろしく！

希実子、少し歩いた先でうづくまる。

そこに香菜が登場。

香菜　あ、帰ってたんだね。

希実子　香菜さん、なんで帰らないの。

香菜　お婆さんのぎっくりが治るまで、泊まりでお手伝いすることになっ

希実子　超イミフなんですけど。

香菜　こうす…あの男の子に、ゴーグル渡せたの？

希実子　もういいでしょ。

香菜　思うんだけど、あなた、まだ中学生だし、男の子とどうこうつてやっぱりちよつと早いと思うんだ。

希実子　は？　なんでそんな事言うの？　親でもないくせに。

香菜　えーと……。

希実子　別に付き合いたいとか、そういうんじゃないよ！

香菜　あの子のこと気になってるのは香菜さんでしょ、だから私が仲良くなるのが嫌なんですよ！

香菜　違う！

希実子　違わない！　どうせみんな私のことなんかどうでもいいんだ！  
そんなことないよ！　(指輪を見せて) ほらね、私、婚約して

香菜　るの。希実ちゃんだって、今はひとりぼっちに思えても、

それはあなたの世界がまだ狭いだけ。世界は広くて、あなたを大切にしてくれる人だっているの。

希実子

……香菜さんの婚約者って、どんな人？ イケメン？

香菜

海の好きな人だったわ。泳ぐのも好きで、毎年一緒に海に行ってた。手が大きくて、水かきみたいになってた。

希実子

なんで過去形？

香菜

えーっと……。今年はまだ一緒に行けてないもの。

希実子

ここでバイトしてるんだから、呼べばいいのに。

香菜

今度連絡しとくわ。

希実子

早く呼んでね。楽しみ！（奥へ）

香菜

あの子も、なんだか記憶とは違う。思春期ど真ん中って、こう見えるのか。

暗転。

荷物を持った杉山が立っている。

そこに走ってくる希実子。

杉山

お、希実子じゃん。

希実子

なんだ、帰るんなら教えてよ！

杉山

え、こないだ香菜さんに話しておいたんだけど。

希実子

は？ 聞いてないよ。

杉山

いいじゃん、間に合ったんだし。（手で希実子の頭をぼんぼんとする）じゃあ、また来年泳ぎに来るよ。

希実子

ううん、今度は私が東京に行く。

杉山

そっか、じゃあまたな。（奥へ）

希実子

またね！……浩輔の手も、水かきついでる。

バスの音、フェードアウト。

神谷がやってくる。

神谷

間に合ったのか。

希実子

……。 （神谷を無視して去る）

神谷 (希実子の行った先を見つめる)

暗転。

### 第三幕 第一場

横になっている香菜、落ちている封筒に気づいて起き上がる。  
封筒を開け、中の便箋を取り出す。

浩輔(声) 希実子ごめん、幸せに。

香菜 (顔を上げて) 浩輔!

香菜の後ろに、首を吊った影が映る。

香菜 いやーっ!!! (倒れ込む)

一瞬の暗転、明るくなると影消える。  
香菜が起き上がると多恵子、登場。

多恵子 香菜ちゃん、ちょっと来て。希実子が、兄さんと進路のことで喧嘩して……。

香菜 え?

暗転。

睨み合っている神谷と希実子。  
奥から香菜と多恵子登場。

多恵子 希実子が、東京の高校に行くって言い出して……。

香菜 ええ？

多恵子 希実ちゃん、落ち着いて話そうね。

香菜 そうそう、東京に行ったのは大学の時……じゃなかった、高校はまだちょっと早いと私も思うよ。

希実子 (香菜に) 浩輔が東京に帰るって、なんで教えてくれなかったの？

皆して、私の人生邪魔してめっちゃめっちゃにするつもりなの！

香菜 あ、それは……。

多恵子 浩輔くんが東京に帰るっていうの、希実ちゃんに教えたのは兄さんだよ！

香菜 そうなの？ じゃあ……、(希実子に) 素直にありがとうって言ってあげてよ。こんなでも、あなたの幸せ考えてくれてるんだよ。

希実子 は？ この人が私の事なんて考えてるわけないじゃん。母さんだって、オヤジがあの日帰ってくれば、手遅れにならなかったかもしれないのに。

香菜 気持ち、わかるよ……。

希実子 嘘ばかり！

香菜 嘘じゃない、私にだって、母さんのためにできたこと、もっとあったんじゃないかって、本当は自分も責め続けている。今でもね。

希実子 わかったようなこと言わないで。大体アンタじゃない、私の世界は本当は広いんだって、もっと外に目を向けるって言ったじゃない！

多恵子 待って、希実ちゃん！

去ろうとする希実子をつかまえる多恵子。暴れる希実子。

多恵子 兄さんも手を貸して！

神谷 ほっとけ、もう好きにさせろ！ 勝手にすれば……。

神谷に近寄り頬を張る香菜。



香菜 何言ってるの、そうじゃないでしょ！

香菜以外の三人、ぽかんとして香菜を見る。

香菜 (神谷に) 本当は行って欲しくなくせに、そういう言い方する

から誤解されるんだよ！ どうしてここに帰って来たのか、

なんで海の家を始めたのか、ちゃんと話さないよ！ もう一度家族をやり直したかったんだって、ちゃんと言えればいいじゃないの！

希実子 は？ やり直す？ そんなの無理に決まってるじゃん。死んだ人は、もう生き返らないの。うちの家族は、あの日からもうやり直せないの。

再び暴れる希実子を抑えに行く香菜。

もみ合っていると、香菜のブローチが落ちる。

慌てて拾おうとする香菜、それを神谷が拾う。

神谷 これは、あいつの……。

希実子 お母さんのブローチ！ なんで持ってるの！

香菜 (慌てて取り返す)

神谷 違う、それは(首にかけていたブローチを見せ)俺が持っている。

多恵子 それじゃ、あなたは……？

香菜 希実ちゃん、あなたの大切な人は、私の大切な人だった。

クラシック音楽が流れると明るくなる。

ガラスの灰皿の横で座ってタバコを吸っている神谷にスポット。

希実子と多恵子は離れて見ている。

黒いベールをかけた香菜が登場。

神谷 (振り向いて) お帰り、希実子。

香菜 (無言で睨みつける)

神谷 杉山……浩輔くんのは残念だったな。まあ、男にはいろいろある。早く忘れることだ。

香菜 忘れる？

神谷 そうだ。お前は若い、人生もまだやり直しがきく。(向き直る)

香菜 何を……。

香菜、神谷のそばまで歩いていくと、灰皿を持ち上げ、神谷の頭上に打ち付ける。

多恵子 やめて！

悲鳴をあげて床に倒れる神谷。

香菜にのみスポットライト。

香菜 若くても、やり直せなくなった人はどうすればいいの、ねえ！

ねえ！(灰皿を打ち付け続ける)

明転。

神谷、元の位置にいる。

希実子 あなたも、希実子なの？

香菜 ……そして、私は、この海に身を投げた。

多恵子 松が浜の、未練崖。

香菜 (うなづく) でも、なぜか生きていて、しかも『かみや』がまだ残ってる。

希実子 『かみや』、潰れちゃうの？

香菜 高校生になった頃に、おばちゃんが過労で倒れて亡くなるの。

そして、(神谷に) あなたは『かみや』の営業権を手放し、

それを元手にした商売が成功する。でも、浩輔が、その『かみや』

を復活させようとしてくれた矢先……。

希実子 浩輔って、あの浩輔が婚約者？

香菜 (うなずく) 浩輔は借金までしたのに、(神谷を指差し) 営業権はこの人によって別のところに売られたあとだった。そして、無一文になった浩輔はこの人に、結婚は認められない、って言われて……。

多恵子 待って、まだ兄さんは何もしてないよ。

香菜 そう、まだね。だから私は、今できることを考えてみたの。

浩輔を死なせないこと。そのためには、私たち親子に関わらせないことが一番いいって。

希実子 だから、邪魔してたの……。

香菜 浩輔が、最初私の方に近づいてたのは計算外だったけどね。でも、(神谷を指し) この人は言ったの、過去は変えられない、過去の自分自身に忠告したとして耳を貸すと思うか、って。

多恵子 みんな、自分が言ったこと、したことなんて覚えていない。

希実子 (うつむくがやがて) でも、浩輔が死ななかつたら、それだけで

私は、幸せになれるの？

香菜 え……。

希実子 東京の高校に行っちゃだめなんだよね？ それで私は、どうすればいいの？

香菜 (答えられない)

希実子 あたし、一番いい方法知ってるよ。先に死んじゃえばいいんだ。そうすれば、他に誰も死なない。

神谷 希実子！

走り去る希実子。

その後を追う香菜と神谷。

連続した水音、暗転。

## 第二場

スポットライトが当たると横になっている希実子と香菜。起き上がる2人。

希実子 死んじゃったの、あたしたち？

香菜 私は、行かないと。(立ち上がる)

希実子 どこに行くの？

香菜 ここは、あなたの住む時間だから。一つの時間に、同じ人間は存在しちゃうダメなの。あなたは私で、私はあなただから。

希実子 あなたは、私で、私は、あなた……？

香菜 (立ち去ろうとする)

希実子 待って！

香菜 (立ち止まって) 世界は、未来はいくつもの分岐でできているって話、聞いたことある？

希実子 (首を振る)

香菜 普通はそんなとこ、誰も見つけられないし変えられない。でも、

私はそこを見つけて、あなたの世界との分岐点を変えてしまった。だから、私は消えなきゃいけないの。これからはあなたが生きて、

私の生きた9年間より、もっと。

希実子 何言ってるの、わかんないよ！

香菜 わかんないかなあ……。じゃあ、人魚姫。人魚姫は、最後には、

泡になって、でも大切な人の未来を守って、忘れられるの。

だから、私のことは忘れなさい。

希実子 どうして？

香菜 もう戻れないのよ、私の時間には。だから、あなたが幸せになってくれれば、それでいいの。(希実子に近づいて幼児を寝かしつけるように) もう一度眠って。目が覚めたら、すべてうまくいくから。あなたなら、未来を変えられる。

希実子 そんな……。

ゆっくり眠りにつく希実子。

香菜、ゆっくりと立ち上がり、幕間に去る。

暗転。

『かみや』の二階、布団に寝かされている希実子。

布団の横でうつむいて座っている神谷。

希実子、目を覚ます。

希実子 う……。

神谷 希実子！

希実子 (ぼんやりと起きる) あたし、なんで……。 (はっとして)

香菜さん、は？

神谷 (黙ってうつむく)

希実子 バイトの。(神谷を振り返り) 香菜さん。

神谷 ……あの人は、見つかっていない。

希実子 嘘。

神谷 (首を振って) 俺は、お前のことで精一杯だった。

(希実子の傍で顔を伏せる) 無事で、良かった……！

希実子 おとう、さん……。ありがとう。(神谷の肩を抱く)

多恵子 (声) にいさーん、お客さん。

神谷 後にしろ。

多恵子 (声) でもー、面接だけだから。

本物の前野香菜が上がってくる。

本物 あのう、こんにちは。

慌てて距離を取る親子、本物を見る。

希実子 だ、誰？

本物 アルバイトの面接に来ました、前野香菜です。

希実子 でも……。だって……。 (混乱する)

神谷 (希実子を手で制して) わかりました。下でお待ちいただけますか。

本物 わかりました。

本物、降りて行く。神谷も遅れて立ち上がり、降りようとする。

希実子 待って、どうということなの？

神谷 (振り返り) あれは……、未来の亡霊だったんだ。

神谷、降りて行く。

希実子 あなたは、私で、私は、あなた。人魚姫……？

スピーカの音楽、流れてF.O。

希実子にスポットライト。

希実子 結局、偽物の香菜さんは、見つからなかった。私は、そのまま地元の高校を卒業した。浩輔とは、大学で会うまでそれっきりだった。

暗転。

### 第三場

中央にベッド、寝ている神谷を囲んで医師、看護師、多恵子。スーツケースを持った希実子と浩輔が登場。  
気づいた多恵子が迎える。

多恵子 希実ちゃん！

希実子 おばちゃん、お父さんは？

多恵子 (喉を詰まらせながら) 声をかけてあげて。

ベッドに近寄る希実子。

多恵子 お兄さん、希実ちゃんが、帰って来たよ！ 5年ぶりね！

神谷 (弱々しく目を開け) き、希実子か……。

希実子 うん。

神谷 (息も絶え絶えに) 結局、俺はお前に何もしてやれなかった、済まなかった。

希実子 そんな事無いよ。私が中学生の時、溺れたの助けてくれた。

神谷 ……そういえば、あったな。

希実子 あの時は、ありがとうね。

多恵子 それだけじゃないよ、兄さん、海の家だけじゃなくて焼き鳥屋もやってたんだから。無理しちゃって…… (涙を拭く)

希実子 そういえば、あの時アルバイトに来てた人も、私のこと一緒に探してくれたんだよね。あれ、違った、その人が来る前だったっけ。

神谷 憶えてないのか。

希実子 うん、あんまりね。

多恵子 無理に思い出すことはないのよ。辛かったことは、忘れていいの。

ううん、忘れなさい。

希実子 え？

神谷 (唐突に) 今、幸せか。

希実子 うん。(浩輔を手招きする) 覚えてる？ 昔水泳部の合宿で

『かみや』に来てた浩輔。

杉山 どうも、ご無沙汰してます。(礼)

神谷 あ、ああ……。

希実子 ぜひ会いたいって言うてくれて。

杉山 それと、よろしかったら『かみや』を僕たちに任せてもらえたらと思うて。

神谷 本当にやれるのか？ 無理しなくていいんだぞ。

希実子 そんなの、やってみないとわからないじゃない。ねえ？

神谷 そうか……。だんだん、かあさんに似てきたな。多恵子、

あれ取ってくれ。

多恵子 はいはい。(小さな箱を持ってきて神谷に渡す)

神谷 これを、おまえにやる。(箱の中からブローチを取り出す)

希実子 これ、おかあさんのブローチ？

神谷 そうだ。

希実子 ありがとう、大切にする。

神谷 (満足そうに目を閉じる)

希実子 ……お父さん？

多恵子 お兄さん！

医師 (腕時計を見ながら神谷の脈を取り) 午後3時27分。

医師、看護師、黙礼する。

暗転。

座っている希実子と杉山。

希実子はブローチを眺めている。

希実子 これ、昔どこかで見た気がするんだよね。おんなじ物を持ってた

別の誰かに、どこかで会ったような。

杉山 俺も、会ったことがあるような気がする。

希実子 そうなの。断片しか覚えてないんだけどね。あなたのこと、

幸せにしてみせるから、って言われたこととか。もしかして、

お母さんの幽霊だったのかなあ？ (ブローチしまう)

杉山 どうなのかなあ。(軽く咳払い) ああ、今日はね。

希実子 うん。

杉山 受け取ってほしい物があった。

希実子 えっ。

杉山 (ポケットから取り出した指輪を希実子の指にはめる)

俺と、結婚してくれますか。

希実子 はい、してあげます。(くすくす笑う)

杉山 ええ、何その言い方。

希実子 だって、してくれませんでしたって浩輔が訊くんだもん。

杉山 じゃー、結婚しますか？

希実子 しますよ。

杉山 だー、そうじゃなくて！

ふざけてじゃれ合う二人。希実子、杉山を抱きしめる。



音楽スタート。

希実子 ありがとう。

杉山 何が？

希実子 生きててくれて、ありがとう。

杉山 え？

希実子 (立ち上がり) さ、今日から海開きだ！

杉山 おう、『かみや』リニューアルオープン、張り切って行くぜ！

並んで走り去る二人。  
暗転。

(了)